

教育革新の第一義

一行の教育の提唱

明星中學校長 兒 玉 九 十

諸政の革新

客 昨今世間で、革新とか一新とかいふ言葉が盛に用ひられて居りますが、この革新といふ事に就いて、修養上参考になることをおきかせ願ひたうございます。

主人 新といふことに囚はれ、くらまされて、古きものは善し悪しに拘らず棄て、了う様な、玉石共に焼くが如きことは勿論大反對であります、少しでも進歩し、向上するために、篤と考へ、研究しぬいての事であれば、革新、一新、共に結構な事と思ひます。

客 革新に就て私共お互が第一に考へねばならぬ事は何でございませう。

主人 夫は昔の聖賢が『徳日に新なれば萬邦これ懐く』と示して居ります通り、自分を反省して、自分の道心を刻々に改善して行く自己革新であると思ひます。

客 現代の私共として革新を要する共通の缺點は何でせうか。

主人 現代人の共通せる缺點は澤山ありまして數ふるに遑なしといふ有様ですが、その中でも一番ひどいのは實踐躬行心の缺乏と思ひます。此の悪風は只今の社會各方面に瀰漫し、あらゆる方面の人々の心の奥底に迄滲み込んで、人の心を蝕んでゐる毒素とも申すべきでありますから、取り立て、證據を挙げずとも、おわかりの事ですが、参考のため二三の實例をあげてみませう。先づ第一に爲政者に就いて考えて見ませう。

昔から『治人の要道は修己にあり』と申しまして、人を治め、人を率ゐるには、先づ自己の徳を修め、身を以て手本と示すべきものと教へて居ります。此は政治家のみでなく、上に立つ人、凡てに示した教訓でありますから、私は政治家のみに、此の通りに致すべきだとは申しませんが、政治家は何としても衆に先んずる人であるから、最も此の様な心得に徹底して居らねばならぬに拘らず、此の大切な道理のわかつて居られる方は残念ながら至つて乏しい様に見受けられます。

先頃、或る宴會の席上で、一政治家が私の所へお盃を下さいましたので、私はそのお盃だけ頂戴して、お酒はつがぬ様にと願ひました所、その方が『先生は子供を導く職務があるから、お酒を召しあがらぬ方が結構です。吾々は政治家で先生とは違ひますから酒も飲むがいゝし、少し位は道德に背いてもいゝと思つてゐます』と、おつしやるのです。宴會の席での挨拶とは言へ餘りの鐵面皮の話に私は御返事も出来ませんでした。此れが凡ての爲政者の心事とは決して思つて居りません。が併し、多數のかうした方面の方々の代表的の心事であると認むる事に餘り異存者はないと思ひます。先生ばかりが手本を示せば他の人は何をしよう勝手だといふ考へで國家、社會が向上發展充實するものと思つてゐるのは實に情なき事ではありますが、事實は以上の通りであります。斯様な心持でありますから、何事によらず、自分の實踐躬行は他所にして了つて、國民にばかり、あゝせよ、かうせよと實行を命令する様な事になるのだらうと思ひます。

先日、或る省の大臣が毎朝定刻に登廳するといふ、私共からすれば極めて當然の事を、宛で大聖人でも出現したかの如き句調で新聞が書き立て、居りますので、役人に聞いて見た所、從來、上の人程定刻に出る事は極めて稀なものと申して居りました。自分が實行しないで官紀振肅官紀振肅と大聲で掛聲ばかり繰返して居る役人が、萬一人でもゐるならば是非反省して戴きたいといふつもりもあつて、第一にこの實例をあげた譯であります。

がこれは爲政者ばかりのことではありません。一般國民の中にも自らの實行、自らの努力をする事をせずして、

補助金を出して貰ひたい、かうして貰ひたいといふ他力本願の人が餘りにも多いと思ひます。

資本家や労働者も大體前例と同様であります。即ち資本家は自分は働かないで、労働者にのみ勉勵を要求しますし、労働者は労働者で、骨折は出来るだけ避けて、而も賃金は一文でも餘計にほしがつて居るではありませんか。

以上はほんの一例をあげたのに過ぎませんが、此の私の觀察は誤つて居ませうか。

客 いや、全くお話の通りと思ひます。

主人 斯様に、國家社會をつくつて居ります人々、即ち國家や社會の細胞が、あげて、自分は實行努力せずして、他に依頼し、自分の責任を感じないで、他方を責める事ばかりいたして居りまして、國家の維持、充實、社會の發展が出来るとお考へになりますか。

客 人間一人々々が集つて出来てゐるのが社會、國家でありますから、その一人々々が努力せざる限り、全體が力強くなる事は出来ない事と思ひます。此の様な惡風潮はどうしたら直るものでございませうか。

全人格の教育

主人 手術に取掛る前に、先づどうして此の様な惡風が擴つたものか、其の原因を突きとめて見る必要がありますが、あなたは如何様にお考へですか。

客 私は教育に原因がありはしないかと考へますが、先生のお考へは如何でございませう。

主人 全く其の通りです。原因の大部分は明治以來の教育にあるのです。

客 教育内容を根本的に立て直すべしといふ聲のあるのも當然の事で、呪はしきは明治以來の教育で御座います。

主人 併し明治以來の教育にも功績もあるのですから一概に呪ふ事はよくありません。其の長短、利害を篤と分析して觀察する事が大切であります。

明治教育の長所は歐米の自然科学の知識を普及した事であります。此の自然科学の知識が日本の富國強兵策に役立つ事は確な事實であります。只此の歐米の自然科学輸入に熱中した爲に、日本固有の精神文化が輕ぜられ、自然科学に付きもの、歐米の唯物思想と個人主義思想が這入つて來て、思想界の混亂を惹き起す事になりました。自然科学の輸入は利でありまして、日本の國體、日本精神と相容れざる唯物主義思想、個人主義思想の輸入は弊害であります。

客 明治新教育の利害はよくわかりました。自然科学の輸入はよかつたのですが、此に附屬した唯物思想、個人主義思想の輸入は失敗でしたですね。

主人 唯物思想、個人主義思想を強ひて迎へ入れた譯でもないのですが、外國から棉花を輸入するとペストが附いて來た、同じ様な理窟で何時の間にか科學知識に附着して這入つて來た譯なのです。

客 歐米の思想輸入に依つて混亂の様子が見えた爲に、明治天皇から教育に關する御勅語が御下賜になつたと思ひますが。

主人 そうです。教育勅語は全く外來思想の爲に日本の據り所を搖がされる様な事のない様に、吾々國民の據り所を御示しになつたものであります。即ち日本の教育といふものは教育の御勅語を中心として、自然科学及びその他の歐米の日本のためになる歐米知識も利用して行く事が明かに定つた譯であります。

客 其の様に教育方針が明かに確立して、どうして、大戰後の如き思想混亂時代が實現致したもので御座いませう。

主人 それは、方針が確立致しましても、人間の頭が急に轉回せぬために、教育の實際が計劃通りしつかりと行かなかつたのであります。斯様なわけで、恐れ多い事には、教育の御勅語の御下賜がありまして、その徹底方には随分遺憾な事があつたのであります。一例をあげて見ますと、他の學科は合併教授を許さなかつたのであります、修身體操は合併にやつてもいゝ様な事になつて居りました。體操は團體運動指導上、合併教授の必要もあるのですから、よろしいとしても、修身の合併には何の理由もないのです。校長などが各教場に出る代りに講堂でやれば、

五學級の學校とすれば、五時間要するのを一時間で済むといふ教授者の側の便宜のために、その様にきめたものと思ひます。これらは何と言つても、德育輕視の明かな證據と思ひます。

客 なる程、そうおつしやられると、私共の中學校の時も修身は講堂で合併教授で、生徒は話を聞く様な恰好をして、英語の豫習などをいたしたものです。學校の當局も重んじて居ないので生徒の方は一層輕んじてゐたと思ひます。

主人 左様な次第で學校といふ處は各學科、特に自然科學を詰め込む事を大使命と心得、道德教育、精神教育の徹底などの事は全く眼中に置かなかつたのであります。即ち學校は教科書を詰込み、試験をして點數をつけ、卒業證書を持たせて出すといふだけで、人格を練り、人間教育を致さうなどといふ考へは、殆んどないと言つてもいい程であつたのであります。

此の様な教育であれば、先生は教場で教科書の説明する事と、試験の採點をすればいい事になり、自ら先に立つて實踐躬行して手本を示すといふ苦みがなく、至極呑氣で、先生自身大喜びといふ譯であります。生徒も頭腦の觀念運動だけで面倒が少いので、それをいい事として喜びました。此を長く續けて居る間に、教育といふものはかうしたものといふ考へが、凡ての人に出來上つて、何の不思議にも思はなかつたのであります。

客 そうすると、今迄の教育は人格教育、即ち人間を作る教育ではなかつたのですね。

主人 そうです、人間の形をした機械を作ると評しても過誤ではない様な教育をしてゐたのです。その結果が有識弱行の徒を作つて了つて、それらが高等教育を受けて居りながら、洵に恥かしき種々の問題を起して居るのです。續出する各種の疑獄なるものに、高等教育を受けた人間が非常に澤山加つてゐる事が、最も有力に、明治の偏智輕徳教育の失敗を物語つて居ります。

客 明治の教育が偏智輕徳の觀念教育で、實行力ある人物教育をしなかつた失敗はよくわかりました。明治教育はそうとしても大正、昭和の教育は如何ですか。

主人 大正昭和の教育は明治教育の延長であつて、私のいふ明治教育の中には、大正昭和の教育も含んで居るのです。

客 此の偏智輕徳教育を革新するについては、如何様に致すべきでせうか。

主人 智情意の全體を圓滿に育てる教育にする事です。之を吾々教育者仲間では『全人格教育』とか、『全人教育』とか申して居ります。つまり今迄の如く智育だけで満足しないで、智育と共に情意の陶冶を重ざる教育にしなければならぬのです。

家庭と學校とは密接に

客 智育の方は各學科に依つて行ふので、よくわかりませんが、情意の陶冶は如何様にして致すのですか。

主人 美術、音樂、作業、宗教性の培養等専ら日常の生活に即して致すのであります。

客 美術音樂などは現在の學校でも致して居る様であります。作業とか、宗教性の培養などは如何様にしたらよろしいのでありませうか。

主人 作業、宗教性の培養については學校と家庭と協力して行ふより外に道はありません。智育でも學校家庭の協力を必要としますが、情意陶冶も關係深き作業とか、宗教性の培養は兩者の密接なる協力を最も必要といたします。

客 昨今、學校に於ける作業教育は大分、盛になつて來た様ですね。

主人 え、大分盛になつて參りました。私などが二十數年前、作業教育を始めた頃は各方面からいやがられましてね、第一生徒自身が耕作したり肥桶を擔いだりする事をいやがりますし、家庭では、『宅の悴は箸と筆より重いものを持つた事がない』、など、言つて子供が學校へ出て勞働しない事を得意とする時代ですから、この思想に逆行する作業など、喜ぶ筈がありません。監督官廳などでも、中學校が何で農學校の眞似をするのだ、など、苦情を申す程一般が無理解でした。此の時に比べると、作業が正科になつただけでも隔世の感があります。

併しまだ、多くはマ、事遊びの様なやり方で、ほんとの作業になつて居りません。獨逸のヒットラー總統が創

始しました労働奉仕團（アルバイト・デイーンスト・ラガー）などの徹底振りと比較にならぬ程遊戯的と申しませうか、不徹底なる事は甚だ遺憾な事であります。

客 獨逸の労働奉仕團といふのは學校ですか。

主人 學校と申すよりは労働に依つて心身を鍛錬する所ですから、勤勞鍛錬所とでも申すべき修養所で、日本の各地にある農民道場と申す様なものです。一定の場所に青年を六個月間寄宿せしめて、労働に依つて精神肉體の同時鍛錬をなし、國家社會の如何なる仕事にも喜んで従事する人物基礎を造らうといふのが目的であります。就職にも大學への入學にも此の奉仕團卒業の證明が必要になつて居ります。

客 日本でもその様な組織を造つたら如何でございませう。

主人 出来る結構と思ひます。但獨逸の猿真似では駄目です。農林省あたりで莫大な費用を出して『農民道場』を造つても、其の任に當る人がなくて徹底しなくて困つてゐると、其の方の關係者が申して居りましたが、いくら組織を作つて見た所で、其の任に當る眞實の人物がなければ出来るものではありません。

教育者としての態度

客 先生が先刻お話の、學校に於ける作業教育の不振といふ事も、適當な先生のない事に原因があるのですか。

主人 全くその通りです。先刻お話し致した通り、日本の明治以來の學校教育といふものは教科書を説明するとか、ノートブックに筆記をさせ、試験して成績をきめ、免状を持たせて卒業させるといふやり方でせう。一方、教員檢定試験にした所が、學校でやつてゐる試験と少しも變りはないので、答案が書けて居れば合格するのです。頭だけどうにかかうにか出来ればいゝといふ有様です。其の頭の作用としても、諳記が主になつて居る事は御承知の通りの實際です。頭の中の考を實現實行に依つて完結するといふ實踐方面は修養して居りませんから、身を以て指導する事を非常にいやがりますし、其の自信も乏しいのです。左様な譯ですから自ら陣頭に立つて生徒を導かねばならぬ作業教育などは、多くの先生は迷惑至極と考へ、教壇で講義し試験する樂な道にばかり進みたがつて居ります。

先生が實踐躬行を厭つて居るのでから作業教育の成績があがる筈はありません。

客 そうすると先生の頭の改造が先決問題でございませうね。

主人 そうです、先生の頭も、學者の頭も、父兄の頭も、大臣の頭も、實業家の頭も、商人の頭も、役人の頭も、農業者の頭も、老若男女、凡ての人の頭を根本的に立て直す必要があります。

客 改造の中心をどこに置くのですか。

主人 夫は申す迄もなく『實行』といふ事に中心點を置くのです。人間の考へといふものが完成し完結するのは實現實行の時でありますから、實行の中には考へ、思惟といふ頭の働きの部分が包まれて居るのであります。行は外に現れた考へで、考へは頭の中の行でありますから、元々一貫したもので、別々にすべきものではありませんが、行に現れて、始めて考へが完結し、世の中の爲にもなるのですから、行を中心にして行く事が最も當を得た事なのであります。然るに従來は觀念と申しまして行からすれば前の半分たる頭の内の動きだけを重視して、行の方は殆んど注意しないといふ風になつて居りました。

かう申しますと、屹度、それは従來の主知主義、即ち觀念主義の反動ではないかと思ふ人があるかも知れませんが、決して知を輕んじて實行のみを重しとするのではないのであります。正しき實行は正しき思惟によつて出来るのでありますから、實行を重んずる事は同時に實行に現れる頭の内部の動き迄重んずる事でありませう。又實行により一層思考を確實にしようと思ふのです。

之をもつとわかり易く申すなら、人間は心と體とから出来て居りますが、心身は不二で、分離する事の出来ない事は御承知の通りであります。心身は一體不二のものであるならば、心の中で起る考へと、身體を通じて現れる行ひとが、一體不二で別々にすべきものでない事は、當然の事でありませう。心行不二の働きを、心を包む行ひとといふ

もので、言い現し居るに過ぎないのであります。

客 私は今迄実践躬行などいふと、何だか極めて浅薄な、お座なり式の、思索なき無學の人々のいふ事で、舊式のつまらぬ事のように思つて居りましたが、思索の完成といふ事を伺つて、従來、一般から重んぜられた主知主義、觀念主義の不足を補つて、觀念主義の至り得ない處に迄、人を向上させる大切なものである事が始めてわかりました。

主人 ちと話が理窟張つて來てお氣の毒でありましたが、実践躬行といふ主張の意味がよくわかつて結構であります。此の實踐躬行主義の思想に基いて叫ばれ出したのが勤勞々作主義の教育とか、體驗主義の教育、若くは行の教育であります。學者は觀念主義教育を主知主義の教育といふのに対して、實踐躬行主義教育を主意主義の教育など、申して居りますが、それは實踐躬行主義が、智情意といふ心の全體を育て上げる事を目的としてゐる事を、よく理解しない結果でありますから、その様な事をいふ人があつても、誤解されぬ様念のため申添へて置きます。

實踐躬行主義の教育は、人間の心の働き全部の發達、即ち智、情、意の統一的發達を求め、更に、心と肉體との調和的進歩を目的にしますから、全人格教育と申すべきでものであります。

實踐躬行と信念

客 行の教育を徹底させるためには如何様に致せばよろしいものでございませう。

主人 それには先刻申した如く學校であれば先生、家庭であれば両親といふ様な人々が、躬を以て範を垂れる様に努力する事です。此を『示範指導』と申します。學校であれば先生は生徒の頭を造るために、即ち正しき實行の出来る様に、教科書に依つて智育をします。此の智育を徹底させる爲には、常に實生活と連絡して其の知識を活用させ、實生活の向上を計ると共に知識の強化、確立化を計らねばならぬのであります。

例へば理科で空氣の人體に及ぼす影響を教へる時、盛に新鮮な空氣の必要を説明して居りながら、その教室の換氣窓は締め切つて居る様な事をして居ります。

やはり或る學校の生理衛生の時間に先生がニコチンの毒について話して、禁煙法に迄説き及んだのでした。すると一生徒が『先生ニコチンは満二十歳以上の人には害はないのですか』といふ質問が出ました。先生は『二十歳以上の人にも有害です』と答へました。その生徒は『おとなにも有害なら、禁じた方がいゝではないですか』と問ひました。先生は『習慣付いた大人を廢めさせるのは容易ではありませんから』と答へて先生は赤面して居りました。先生が赤面したのは先生自身が喫煙してゐたからであります。此の場合、先生が自分のんで居らんのなら、自信を以て『大人にも有害であるが、一度習慣が付くと有害と知りつゝ、廢める事が出来ないで、心身を害するから、斷然この様な悪習に染まぬ様にすべきである』と話す事が出来、生徒もその先生の毅然たる確信の導きに肝銘し悪習排除の強き力が内に出来る筈であります。

『人は此々であるべきだ』とのみ教へるのが、従來の主知主義、觀念主義教育の行き方ですが、行の教育に於ては『人は此々であるべきだ』と教へると共に『だから諸君はその通りにせねばならぬ。さあ、先生と共にそれに向つて進まう』といふ行き方をするのであります。

客 そうすると先生は大分、窮屈で骨が折れますね。

主人 そりや勿論です。併し人生何事でも骨折を避けて目的を達するものは一つたりともないでせう。苦みを苦みと思はず、苦みを樂む處に、眞人生があるではありませんか。熊澤蕃山先生は『憂き事のなほこの上に積れかし、限りある身の力ためさん』といふ意氣で進めと教へられ、孟子は『天の將に大任を是の人に降さんとするや、必ず先づ其の心志を苦しめ、其の筋骨を勞し、其の體膚を餓やし、其の身を空乏にす』と教へて居られます。此等は何れも吾々人間が理想に向つて向上の一路を辿るために苦しみは當り前で、此こそ天道即ち宇宙の大道であると示されたものであります。

苦しみを恐れず、此の苦しみに喜びながら當つて行く所に凡ての發展と完成とがあるとするならば、己を作り、

人を作る教育といふものも此の大道外にある事は出来ないであります。

客 先生は職掌柄、仕方がないとして、家庭教育に於ても両親や年長者はそんなに厳格にせねばならぬものでせうか。

主人 そんなに厳格とおつしやるが當り前の事なのです。厳格といふと何か無理押し付け、壓迫でも加へる様にも取れますが、子供は子供なり、大人は大人なりに、實行すべき事が違ふので、無差別平等に、無理やりに實行さすといふ様な事は、毫もないのです。従つて学校の先生は職掌だからいたすの、両親は職掌が異ふから致さなくていいといふ様な事はないのです。

客 そういたしますと、餘程確乎たる信念がなければ出来ないではないでせうか。

主人 確乎たる信念を要する事はいふ迄もありません。人間のなす事は何事によらず半信半疑で出来るものではなく必ず確信に基かねばならぬのですが、特に教育の如く人を導く事は確信が必要であります。取り別け、實踐躬行には信念が必要なのであります。寧ろ實踐躬行と信念とは同義語と言つて宜しいのであります。

客 『行の教育』といふ事が宗教々育と同じ様な意味で昨今盛に用ひられ出したのも、只今のお話しの様な譯でせうか。

主人 左様です。神佛と人間との關係が何うの斯うのといふ様な理窟をこね廻はす事は、宗教學の研究で、宗教そのものではありませんから、宗教心の現れた活動方面に直ぐ様這り込んで、直ちに敬虔、感謝、祈願といふ様な事に觸れさせ、實驗、體驗から天賦の宗教性を培養し、人格を向上させようと云ふのであります。内燃機關の物理學的性能がわかる迄は自動車を運轉せぬといふのでは、何時運轉に着手出来るかわからないので、内燃機關の理窟は後廻しにして、先づ運轉を練習せしめ自動車運轉の力を我がものとさせようとするのと同じであります。

客 なる程よくわかりました。自轉車に乗れる様になれば、必ず自轉車を利用する様に、自動車の運轉が出来る様になれば、運轉せずには居れないでせうから。

主人 そうです。體驗を繰り返す内に眞髓に觸れ、冷暖自知で妙味を會得して確信となります。内なる確信は必ず外に實行として現れて參ります。

此の内なる信が、行となつて外に現れずにをらぬ處に、宗教信念の伸長があります。

従つて純粹無垢の敬虔感謝の念の現れざる信仰は眞信仰でないと言つても過言ではないと思ひます。現代人の實踐躬行力の缺乏は信念の不足より來て居りますから、信念培養上最も有力なる宗教心の涵養が必要であります。明治維新以來、教育と宗教の分離策に力めてゐた文部省が、昭和十一年十一月廿八日、宗教的情操涵養獎勵の通牒を各學校に發したのも人間天賦の宗教心の培養により信念涵養の急務を覺つた爲であります。

宗教々育の捷徑

客 人格を完成するに就いて宗教心涵養の必要なる事がよくわかりましたが、人々を宗教へ入らしむる最も簡単な方法即ち宗教々育の捷徑とでも申すべき事を伺ひたいのですが。

主人 あなたは宗教といふものが人の心以外に別個に存在して居る様に考へて居らるゝ様であります、各人の心の中に誰でも持つて居るので、それを氣付かせる事、育て、行く事が宗教々育で、外から宗教といふ特效薬を注入するではありません。人間の生れる時自然に授かつてゐる天賦の宗教心を培ひ育てる近道は、宗教心の外への現れである所の敬虔、感謝、祈願といふ様な事を日常生活に於て實行せしめ、敬虔、感謝、祈願の妙味を味ひ修得さすにあります。甘いお菓子を如何に美辭麗句で話した處で、其は形容に過ぎず、お菓子の影であつて、お菓子の實物ではありませんから相手の人には眞實のお菓子の味はわかりません。眞實のお菓子を知らするには食べて味つて貰ふ外はないのであります。食欲を起すために、美辭麗句の效能書も無論必要であります。けれどもそれは何と言つても助言であり、車の後押しであり、野球試合の應援團に外ならないのであります。

それで生活に依る宗教心培養の簡単な方法は色々ありませうが、本誌五月號の『家庭の宗教化』で申した如く敬に徹底せしむる、即ち人に對しても、物に對しても、人と人との間に起る事柄に對しても、いゝ加減にせぬ事、換

言すれば日常生活を、神佛を頼む心でなし、いゝ加減にせぬといふ事に進む事が一番わかり易く、出来易いと思ひます。此の事につき一二の實例をあげて見ませう。

○と云ふ者は某帝大を出て醫學博士となり、銀行から金を借りて大きな病院を立てました。此の人は學問もあり、力量もあるのでありませうが、兎角それを鼻にかけて慎みの氣持が失せ、人に對しても尊大であり、診察も丁寧さがなく、いゝ加減でありました。此の院長の人格が風をなして、他の従業員も威張つて、病人に對する親切心など殆んど見られませんでした。それで世人の信用を失ひ、診察を受けに来る人も段々減りあはれな状態であります。

その附近にHといふ某醫專出の開業醫が居りますが、此の人は常に神佛を尊び、常に自らの足らざるを恐るといふ様な心掛けの人でありまして、何につけてもいゝ加減といふ事なく、何人に對しても眞心を以て診察し、自分の出来る限りの至誠を盡す人でしたから世人の信用益々厚く、○病院へ行つてみた人も、皆H醫院へ行く様になりました。

いゝ加減にすると、いゝ加減にしないとでは斯様に正反對の結果になります。私は吾々日本民族が宇宙の大道を體現し給ふ現人神を中心に相手の人に對しても神々に對すると同様に、尊、命の字を付して人を敬ひ、飯といはずして、御飯といひ、食ふとはずして戴くといふ風に何事に對しても敬虔そのものの宗教生活をなしつつありし、あの氣高い昔の姿に立戻つて御國の充實をはかる様、敬虔行躬行の風を旺盛にいたしたいものであります。

客 詢に結構な純粹敬虔行の活きたお話、ありがたうございました。

児玉九十「教育革新の第一義 一行の教育の提唱」 解題

廣 嶋 龍太郎*

児玉九十(1888 - 1989)は大正期から昭和期の教育者であり、戦前においては成蹊学園の主事を経て明星実務学校(のちの明星中学校)の校長を務めた人物である。本稿では、大法輪閣発行の「大法輪」第三卷第十一号に掲載された「教育革新の第一義 一行の教育の提唱」(以下、一部を除いて「教育革新の第一義」と略す)における児玉の教育論について、掲載誌の性格や当時の時代背景などを踏まえて解説したい。¹

1. 「大法輪」と大法輪閣

掲載誌である「大法輪」は、1934(昭和9)年10月から2012(平成24)年現在に至るまで刊行されている月刊誌である。創立者の石川俊明は曹洞宗の人物であり、仏教を広める目的で「大法輪」を創刊したとされている。²

「大法輪」第一卷第一号刊行当時の「創刊の辞」は以下の通りである。³

時は正に非常時、国運進展せんとして、東亜の新黎明に、警鐘が鳴る。思想問題に、国防問題に、生活問題に、その徹底せる解決を求めんとするの聲は、喧々囂々として耳を聳するばかりである。而も国民は、今尚統一ある帰趨を見出し得ない。そは何故か、真の信念無き為である。此時に当りて、仏誕二千五百年を迎ふ。大聖釈尊の教法、そはこの無明の長夜を彷徨する大衆に、与へられたる唯一の大燈炬ではないか。茲に於て、『大法輪』は正法を大衆に伝ふべき使命を以て、創刊せられたのである。

創刊の目的である「正法を大衆に伝ふべき使命」を反映し、創刊号の記事は「正しい座禅の仕方」や「信仰の体験を語る」といった大衆生活の目線に立った記事や小説などから構成されていた。創刊号の編集後記には、「仏教の大衆化」の宿願のために同書を出版した旨が記されている⁴。また、第一卷第三号の広告欄にも「本誌は、仏教といふ立場に立ち、一宗一派に偏せず、各宗に互つての記事を、循環的に掲載し、以て仏法の法悦に、遍くしたつて頂きたいといふ願望」によって発行したことが、大法輪閣の名義で示されている。⁵

なお、創刊当時の雑誌の目的について、同社の編集人(1999年当時)の中野顕昭は、「もっと仏教を広めなければならない」、「仏教の本当のところをみんなに知ってもらいたい」と願ったものであると表現している⁶。また、「大法輪」の書名については、創始者が曹洞宗の出身であったことから、道元の『正法眼蔵』に登場する「大法輪に転じ」などの文言からとったものではないかと指摘している。⁷

2. 「大法輪」における児玉九十の記事の位置づけ

児玉九十は1936(昭和11)年から1937(昭和12)年にかけて、「大法輪」の計八本の記事に登場する。同時期の児玉の掲載記事、掲載号、肩書は以下の通りである。(下線は本稿の解説記事)

* 教育学部 助教 日本教育史

「宗教と教育の座談会」第三卷第三号（文部省普通学務課長・堀池英一、同督学官・龍山義亮、青山師範学校長・長谷川乙彦、明星中学校長・児玉九十、成溪学園長・浅野孝之、聖和学苑長・小松千莎、大日本母の会総務・小林珠子、駒沢大学教授・高田儀光）

「家庭の宗教化」第三卷第五号（明星中学校長・児玉九十）

「教育革新の第一義 — 行の教育の提唱」第三卷第十一号（明星中学校々長・児玉九十）

「国民保健と教育 — 行の教育の提唱」第三卷第十二号（明星中学校々長・児玉九十）

「互尊互敬精神の教育」第四卷第一号（明星中学校校長・児玉九十）

「不滅の法輪 オリムピック大会と精神教育の革新」第四卷第二号（児玉九十）

「変態時局と国民の覚悟」第四卷第三号（明星中学校長・児玉九十）

「自発敢為の教育」第四卷第四号（明星中学校長・児玉九十）

児玉が最初に登場する「宗教と教育の座談会」は文部省関係者や学校関係者などを集めて行われた座談会を収録したものであり、児玉は明星中学校長の立場で登場している。その二ヶ月後には「家庭の宗教化」の題で児玉単独の記事が掲載される。同年の第三卷第十一号の「教育革新の第一義」から翌年の第四卷第四号「自発敢為の教育」までは、「客」と「主人」の対話形式となっている。これは、特定の論題に関して客が主人に問いかけ、それに主人が答えるという内容である。児玉による対話形式の論説は、教育の専門誌ではなく教育以外の雑誌において散見される。⁸

では、児玉の記事について、当時の「大法輪」はどのような意図と評価の下に掲載したのであろうか。掲載号の「大法輪」第三卷第十一号の編集後記には、児玉の記事に関して以下の記述がある。

教育刷新が文教の府に於いても企図されてゐる。児玉九十氏の『教育刷新の第一義』は宗教々育の立場から新教育道の根幹を示された雄編であり、特に地方青年指導者層への指針として贈る。

まず、「宗教々育の立場」との記述があるが、児玉は「大法輪」に登場した当初から宗教教育論を提示している。上述したように第三卷第三号の「宗教と教育の座談会」と第三卷第五号の「家庭の宗教化」が掲載されているが、前者は文部省の宗教教育に関する通牒をもとに宗教と教育の関係について論じた座談会の記事であり、後者は家庭生活における宗教性の涵養を指摘したものであり、いずれも「教育革新の第一義」における宗教的論考の前提となっている。これらの論考で児玉が意図した宗教性とは特定の宗派を対象としたものではなく、敬い慎む気持ちといった一般的な精神性を指すものである。児玉は「宗教と教育の座談会」で初めて「大法輪」に登場したが、はじめは宗教教育論を期待されて記事の執筆にあたっていたと考えることができる。

次に、「新教育道の根幹」の記述であるが、児玉は新教育運動の教育実践に位置づけられる成蹊学園において主事を務めた経歴を持つ。後に、その教育経験を基礎として明星実務学校（後の明星中学校）を設立しており、児玉の教育活動は新教育に続くものと位置づけることができる。また、それ以外にも「教育刷新」という論題からこのように評されたものと推察される。

最後に、「地方青年指導者層への指針」であるが、これは、当時の時代背景とも関係する。1924（大正13）年には内閣総理大臣の諮問機関として文政審議会が設置され、「国民精神の作興」「教育の方針」「その他文政に関する重要事項」を調査審議し、その審議結果を内閣総理大臣に建議する権限を有した。文政審議会は1935（昭和10）年に廃止されるまで、同様の権限をもって存続したが、この文政審議会の議を経て1926（大正15）年に「青年訓練所令」及び「青年訓練所規程」が公布され、小学校修了後業務に従事する青少年大衆を対象とした青年訓練所が発足することとなった。

この青年訓練所と既存の実業補習学校とは同じ青年層を対象にしており、両者を一本化するという文政審議会の議を受けて、1935（昭和10）年に「青年学校令」が公布されている。このように、児玉の記事掲載当時において、青年教育は国家的な課題であり、「教育革新の第一義」はその指導指針として、時代の要請に応えることを意図した論考であったと考えることができるのである。

3. 「教育革新の第一義」の内容と児玉九十の教育論

さて、次に児玉の掲げた論題に登場する「教育革新」と「行の教育」について解説したい。まず、「教育革新」とは、いったい何を指すのであろうか。ここではまず、当時の教育改革について検討した上で、「革新」の言葉について考察する。

「教育革新の第一義」の文中では、「教育の悪風」の原因の大部分が「明治以来の教育」にあると指摘されている。ここで、当時の教育制度の変遷を概観したい。大正期に入ると、明治維新から半世紀以上が経過したことから、「学制」以来整備されてきた諸々の教育制度の見直しが必要であると指摘されるようになった。1917（大正6）年9月には内閣に臨時教育会議が設けられ、教育制度の見直しに加えて、大戦後の新しい時代に対応した教育の諸方策の検討が試みられた。臨時教育会議の答申によって「市町村義務教育国庫負担法」や「大学令」「高等学校令」「高等女学校令」「中学校令」「幼稚園令」が発令されている。

1919（大正8）年に臨時教育会議は廃止されたが、同会議の答申を実施に移すための細案について審議するため、新たに臨時教育委員会が設置された。さらに、この後も教育に関する審議会が継続して設置されることとなる。まず、1921（大正10）年には、内閣総理大臣の監督の下で臨時教育行政調査会が設置され、普通教育に関する施設と教育費や、その他の教育行政に関する事項を調査審議した。臨時教育行政調査会は内閣総理大臣の諮問に応じて意見を開申し、関係各大臣に建議することができるものと定められていた。また、1924（大正13）年には上述した文政審議会が設置され、1935（昭和10）年まで存続した。

1937（昭和12）年には内閣の諮問機関として教育審議会が設置され、答申によって戦時下の教育の方針を決定づけた。特に、公民教育と実業教育、軍事教育の役割を担った青年学校の改革が行われ、答申では青年学校教育の義務性が承認されている。

このように、大正期から昭和初期にかけて、明治以降の教育を改革する動きが続くのであるが、児玉が「教育改新」と指摘する内容は個別の名称がないため判然としない。そこで、同時期に出版された他の論考を参考にしてみたい。「教育革新の第一義」発行と同年の1936（昭和11）年に、児玉は帝国教育会編の「帝国教育」において、「内閣審議会公表の文教刷新の目標を評す」との記事を寄稿しているが、そこでは「総理大臣官邸において開催せられる内閣審議会最後の総会に於て、『文教刷新の目標』に関する審議経過が報告せられ」たことを論評している⁹。この記事の結論として、児玉は教学を刷新しなければならなくなった原因は教育行政機構の不備と教育蔑視の弊風であるとし、文部省が教育行政上の全責任を取り、特に教育者を尊重する精神をもって刷新にあたるように指摘している。

さらに、審議報告には、当時の教育事情の弊害として「実践躬行の風衰へたる事」が指摘されているが、児玉はそれに対して「全然同感である」と評している¹⁰。加えて、続く論説では知育偏重を改めて、「知・徳・体の三育を融合渾一したる全人教育」こそが重要であると説いている。これらの論評には「教育革新の第一義」と同様の教育的関心が示されており、当時の教育改革を具体的に批評する姿勢が表われている。

また、児玉は「教育革新の第一義」の文中で、明治期の教育の長所を自然科学の知識を普及したこととし、短所はそれに付随する唯物主義思想、個人主義思想が日本に入ってきたことだと指摘している。これと同様の指摘は、この記事から三年前にあたる1933（昭和8）年の「帝国教育」に掲載された「功利主義・利己主義教育の破産」で明らかにされている¹¹。同書で児玉は1932（昭和7）年に起きた五・一五事件について論じており、その中でも、五・一五

事件の公判における被告の陳述から「吾が国現在に於ける格段の行詰りは政党、財閥、特権階級の腐敗、墮落にありとなし、之を除く事が社会革新の第一歩なり」との文を引用し、政党、財閥、特権階級の腐敗、墮落が事件の核心であって、その原因の大部分を占めるのは明治以来の功利主義の思想であると指摘している¹²。その上で、これらの弊を除き、あるいは防止する役目は、教育家や宗教家による本質的な活動であると主張しているのである¹³。

児玉は、欧米の科学主義による知育の恩恵は認めつつ、個人主義、利己主義的な思想が徳育に与えた影響を懸念して、「国民全体の精神生活」において「社会革新」を行うことが教育の使命であると指摘する¹⁴。この論考にはその方法論までは明示されていないため、後に「大法輪」などの掲載された論考が、それを受けたものであると推察される。すなわち、児玉の論じる「革新」とは、当時の教育改革だけでなく、教育を通じた社会革新も射程に入れた広い意味を含むと考えることができるのである¹⁵。

次に、児玉の提唱する「行の教育」について概観しよう。「教育革新の第一義」の本文中にもあるように、「行の教育」とは、「作業」の教育や「体験」の教育といった側面を持つものである。児玉はこの記事の半年前に「大法輪」に掲載された「宗教と教育の座談会」でも、当時の明星中学校や前職の成蹊学園で同様の教育を実践していたことを述べている。特に作業教育については、「成蹊に於ては最も徹底致して居りまして、中学校で肥桶を擔がして文部省から実は叱られた。一君の学校は農学校ではない、何故肥桶を擔がしたんだ、と言われた。」という体験談を披露している。このことから、対話形式の主人の教育論は、児玉自身の教育体験に基づいた教育論であると考えられるであろう¹⁶。

また、「行の教育」の説明の中で、児玉は再三「実践躬行」の語を用いているが、児玉は元来この思想に明るい。児玉の自伝によると、掛川中学校時代に二宮尊徳の実践躬行を学び、第四高等学校時代には二宮尊徳の考え方の基となる王陽明の思想を学び、さらには東洋史を専攻した東京帝国大学には、井上哲次郎の「日本陽明学派の哲学」と題する講義によってそれらの学びが仕上げられたことが述べられている¹⁷。「教育革新の第一義」の文中にも、孟子や陽明学者として著名な熊沢蕃山の例が挙げられているのは、その思想的影響を示すものであろう。また、森下によれば、上述の児玉の教育の原理については、実践躬行に通じる「知行合一」の考え方があると指摘されているが、「教育革新の第一義」に示された項目の「教育者としての態度」や「実践躬行と信念」は知行合一の思想に通じるものであると考えることができる¹⁸。実践躬行と知行合一といった教育の原理によって行われるこれらの教育の最終的な目的は、本文中に掲げられた「全人格の教育」であり、行の教育による「全人格の教育」は、すなわち人間を作る教育である。これら昭和初期の論考は、戦後にあらためて示されていく児玉の教育理念に通じるものであると考えることができるのではないだろうか。

注

- 1 「教育革新の第一義」をはじめとする「大法輪」の記事は、児玉九十の論集である『この道五十年』や、自伝である『児玉九十自伝』に掲載されておらず、一次資料として価値があるものと考えられる。
- 2 「福神」第2号、福神研究所、1999年、167頁。
- 3 「大法輪」第1巻第1号、大法輪閣、1936年、17頁。
- 4 同前書、384頁。
- 5 「大法輪」第1巻第3号、大法輪閣、1936年。なお、広告自体に頁番号は明示されていないが、目次前の広告欄に「全日本の仏教信仰の皆様へ御願ひします」との題で掲載されている。
- 6 前掲「福神」第2号、167-168頁。
- 7 同前書、168-169頁。

- 8 たとえば、同時期の1938（昭和13）年に出版された雑誌「いのち」においても、児玉は対話形式の論説「時局と学生 学生よ何処へ行く」を寄稿している。（「いのち」6（3）、光明思想普及会、1938年、55～59頁）
- 9 「帝国教育」692号、帝国教育会、1936年、2-9頁。
- 10 同前書、3頁。
- 11 「帝国教育」634号、帝国教育会、1933年、18-20頁。
- 12 同前書、18頁。
- 13 同前書、19頁。五・一五事件に加えて、「教育革新の第一義」が掲載された1936（昭和11）年は二・二六事件の起きた年であるが、児玉は後に「時代は二・二六事件を契機として、大きく転換しつつあり、教育の理想をおし進める上で私は何かしら重苦しいものを感じておりました」と述懐している。（児玉九十伝編纂委員会編『児玉九十自伝』明星大学出版部、1990年、238頁。）
- 14 同前書、20頁。なお、児玉の論集『この道五十年』では、同様の主張が戦後の児玉の論説においても登場する。
- 15 なお、「功利主義・利己主義教育の破産」の五・一五事件に対する論評にも見られるように、児玉は決して急進的な社会革新を支持するものではなく、むしろ教育や宗教の力によってそれらの弊を防ぐことを主張している。
- 16 「大法輪」第3巻第3号、大法輪閣、1936年、95頁。
- 17 前掲書『児玉九十自伝』156頁。
- 18 編集委員会編『学天の明星を目指して』明星大学出版部、2007年、69頁。

参考文献

- 児玉九十『この道五十年』明星学苑編集委員会、1965
文部省編『学制百年史』1972
名倉英三郎編著『日本教育史』八千代出版、1984
文部省編『学制百二十年史』1992
古沢常雄、米田俊彦編『教育史』学文社、2009

追記：資料の原文にはふりがながあるが、掲載する上で省略した。また、本文中の旧漢字については解題の中で適宜新漢字に改めた。

